

解もある。(池上1982、松村1995) 県内では本遺跡での南西柱穴からの鉄鏃の出土と東平遺跡129号住居跡のカマド袖内の出土例のみで、これらをただちに住居内における祭祀行為とみなすことは不十分であるが、千葉県山田水呑遺跡では住居の南西・北東の柱穴から雁又鏃、方頭斧箭式の鏃が出土している。松村恵司氏は、この出土状況から建物の棟上式に見られる東北隅に鏃矢を、南西隅に雁又の矢を放つ動作を推定している。そして弓弦の儀式的例から柱穴出土の鉄鏃には住居建築に伴う儀礼用としての用途と想定している(松村1995)。

いずれにしても、竪穴住居跡を丹念に掘れば、鉄製品の種類と住居を構成する柱穴、床下、カマドなどの出土状況から単に住居内に放置されたものだけでなく、竪穴住居に関わる鉄製品の儀礼的・祭祀的側面が類推されることを指摘しておきたい。

第3節 手捏土器を用いるカマド祭祀

1 竪穴住居内出土の手捏土器

竪穴住居内のカマド祭祀については従来から多くの研究がある。特にカマドの廃棄過程において土器を倒位に設置し、カマドの封印を行なう行為やカマド構築材を解体し、その上で灯明皿による灯明行為、そして千葉県庄作遺跡から「竈神」と記された土器の出土から各地域でカマド解体に結びついた竈神信仰の存在が明らかになっている。今回、的場遺跡ではSB9カマドの両袖に1個体ずつ正位・逆位の状態で出土しており、これらの遺物はカマドの構築材としての機能よりもカマドに関わる祭祀としての性格が強いと思われる。そこで手捏土器の出土状況からこの遺物のもつ意味とカマドについて検討する。

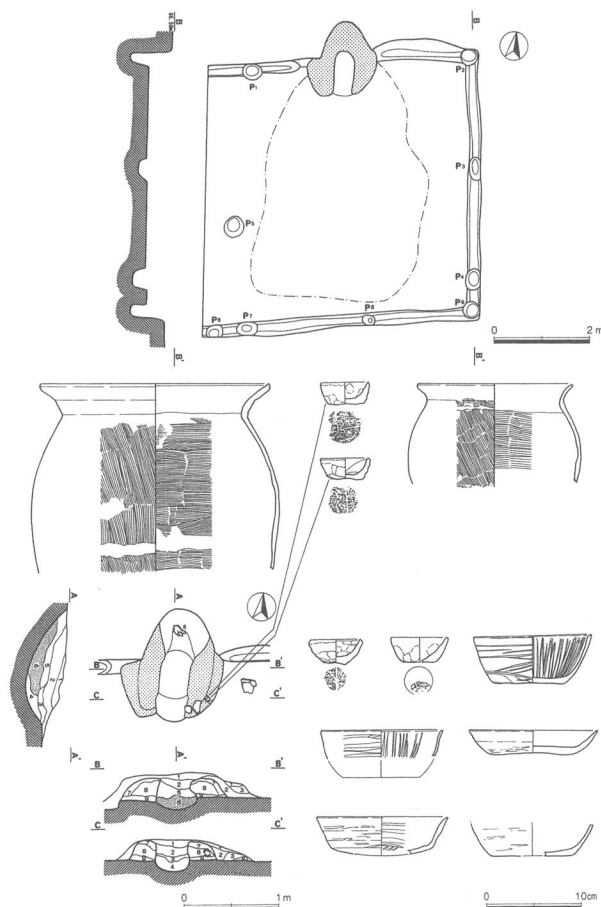
反畑遺跡第3地点(三島市徳倉)

反畑遺跡は扇状地の扇頂付近にあたり、箱根山西麓の舌状台地上に位置する。奈良時代の住居跡が1軒検出されている。住居の規模は南北4.24×東西(4.4m)でやや横長を呈する。主軸は西に10°傾き、カマドは北壁中央に設置される。壁溝は全周し、壁溝内より8本の柱穴が検出され、壁立ちの建物と考えられる。

カマドの袖は粘土のみで構成される。右袖内より手捏土器が合わせ口の状態で2点確認された。さらに手捏土器2点、駿東型坏、甲斐型坏、長胴甕、小型甕などが出土しており、この住居の所属時期は8世紀後半に位置付けられている。当遺跡は伊豆北部地域での丘陵上における奈良時代の集落遺跡として初例である。

中島下舞台遺跡(三島市中島)

中島下舞台遺跡は三島市を流れる御殿川の流域の微高地に立地し、弥生時代～平安時代の集落遺跡である。遺跡の中心は古墳時代後期～平安時代にかけて26軒の住居跡、掘立柱建物跡1棟を確認している。この住居跡のカマド内の遺物を観察すると、16軒の住居跡からカマド内に駿東型の球胴状の甕が2個体ないし3個体分が出



第94図 三島市反畑遺跡1号住居手捏土器出土状況図

土している。次いで多いのが坏・埴類であり、手捏土器は14号住居、7号住居、27号住居で確認されている。特に27号住居では4点の手捏土器が出土しており、鉢形1点と丸底のものが3点みられる。

伊豆通信病院敷地内遺跡（函南町平井）

伊豆通信病院敷地内遺跡は函南町平井に所在し、箱根山西麓の低台地に広がる古墳時代後期～平安時代にかけての大規模な集落遺跡である。現在も継続的に調査が行なわれているが、昭和56年の調査では竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡2棟、その他溝状遺構ピットなどが検出されている。そのうちカマド内から土器が出土した竪穴住居は15軒に及ぶ。カマド内からは甕の出土が多く、1個体ないし2個体の甕が含まれる。15号住居跡からは小型の甕が4点、手捏土器は1点出土している。

東平遺跡（富士市伝法）

東平遺跡は富士山麓の扇状地に位置し、古墳時代末～平安時代にかけて官衙関連の遺跡である。昭和54年、昭和55年に発掘調査が行われ、竪穴住居跡129軒、掘立柱建物跡53棟を検出している。現在も周辺で調査が行われており、集落の様相が明らかになりつつある。129軒の住居跡の中で63号住居跡は調査区の北端に位置する。規模は東西3.9m南北3.6mを測り、ほぼ正方形を呈する。集落内において平均的な大きさである。カマドは北壁やや東寄りに設置され、焚き口、掛け口、煙出し穴等がいずれも検出され、完全な形で残存していた。時期は8世紀初頭に比定される。報告書によればカマド付近の床面から手捏土器が4点出土しているとされる。このようにカマドが破壊されず、完全な状態においても手捏土器による祭祀行為が行われていたと考えられる。

カマド内の手捏土器の出土状況

住居跡からの手捏土器の出土状況がわかるものとして東駿河地域では先ほど上述した三島市反畑遺跡1号住居跡をはじめ中島下舞台遺跡27号住居跡、伊豆通信病院敷地内遺跡15号住居跡などが挙げられる。他にも包含層や土坑、溝内からの出土を含めれば16遺跡で100点以上出土しており、カマド祭祀だけでなく、様々な儀礼・祭祀行為に手捏土器が用いられたと考えられる。報告書による遺物の出土状況が不明なため、詳細な検討はできないが、住居跡から出土している甕や坏などを逆位に設置する例が少なく、むしろ住居内から手捏土器が多く出土していることを併せれば本地域において手捏土器がカマド祭祀として用いられた可能性が強い。

カマドの構築から廃棄過程

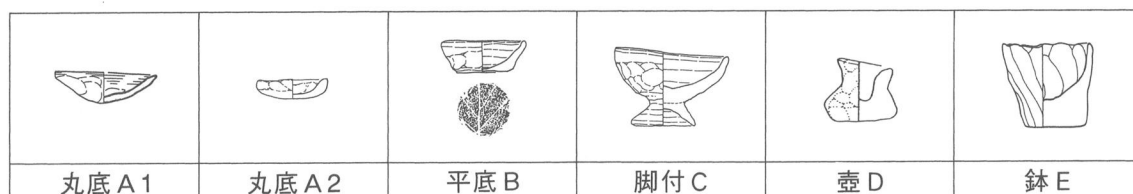
東駿河地域で奈良時代～平安時代の住居跡を掘ると袖や天井を構築していたと考えられる粘土・礫が残存する箇所があり、その中心部に焼土や炭化物が集中している状況（すでに崩落・破壊）からカマドと想定し、トレンチを入れて、カマド構造を把握する調査方法が主流である。その結果、大半がカマドの両袖部、カマドの掘り方のみである場合といった状況で、完全に旧状を保った状態で検出される例は少なく、甕を掛け口に設置された例はみられない。また、燃焼部内から出土する土器は以外と少なく、いずれも甕や坏の破片程度で、完形の土器などはカマド袖の両脇ないしは前方付近で出土している事例が多くみられる。支脚はカマド燃焼部に残っている場合や住居内に廃棄・移動されたものが存在する。

堤 隆氏は竈廃絶のあり方を検討し、検出されるカマドからほぼ旧状を保つもの、自然崩壊するもの、人為的破壊を受けたものに分け、自然崩壊と人為的に区別は困難であるとしながらも、確実に人為的に破壊された例があることを指摘している。そして、カマドのさまざまな様相からカマドを解体する過程を提示し、これは住居廃絶時における普遍的な通過儀礼という性格をもつことを指摘している（堤1990）。

2 手捏土器の分類

手捏土器の分類に関してはすでに渡辺康弘氏が行っており、主に碗・坏形態をミニチュア化したものとして大きく丸底タイプと平底タイプに分けている(渡辺1986)。最近、資料が増加しているので、渡辺分類をもとに若干資料を付け加えた。

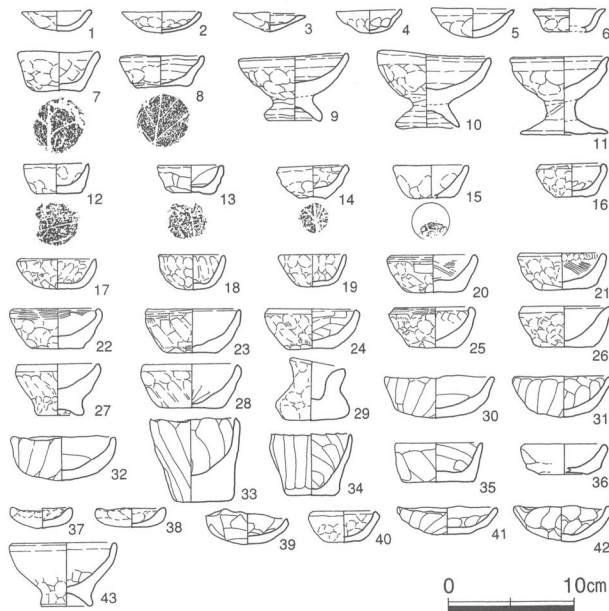
ここでは、丸底タイプをA類、その中でやや尖底状を呈するものをA1類、皿状を呈するものA2類とし平底タイプをB類、脚付きをC類、壺タイプをD類、鉢をE類とした。さらに、口縁部の状態で直口口縁・内湾口縁・外反口縁などの細分が可能である。



第95図 手捏土器分類図

手捏土器の地域性

地域別にみると富士山麓周辺にはA1類、B類、黄瀬川流域ではB類、C類、田方平野はA2類、B類、E類の手捏土器が分布する。数量的に最も多いのは、全地域を通じて共通のB類の手捏土器である。この土器は底部に木葉痕が残り、駿東型の球胴状の甕と胎土が近似する。口径は5cm前後のものと7~8cmのものが認められる。主に狩野川・黄瀬川流域の集落遺跡からの出土が多い。次いで多いのがA類で一定の住居跡に限定的に出土しており、A1類は東平遺跡の住居跡にみられる。A2類は伊豆通信病院敷地内遺跡で出土している。C類は基本的にB類の坏に脚部が付いたもので、清水町外原遺跡で出土例がある。これはカマド祭祀に用いられたものかは不明であるが、その可能性は高いと思われる。住居から出土する個数をみると2個ないし4個と複数の出土が認められる。これらは通常、1住居内からは同種の手捏土器が出土している。富士山麓周辺の住居跡で複数出土している場合にはそれぞれA類・B類とも同種の手捏土器が出土し、A・B類の組合せで住居内から出土は認められない。これは他地域でも同様の傾向を示す。このように東駿河全域で共通する手捏土器(B類)とさらに狭い小地域で独自の手捏土器(A1・A2類・C類・D類など)あるいは古墳時代からみられる伝統的なもの(E類)が認められ、それぞれ集落内の規範により同種の手捏土器を用いる祭祀行為が行われていたと考えられる。竪穴住居内からの手捏土器の出土は6世紀後半段階にすでに認められるが、7世紀末から急激に増加し、8世紀代はピークを迎え、9世紀まで残る。



- 1 東平 SB87 2 東平 3次 SB1 3 東平 SB72 4 天間代山 SB7 5・6 東平 3次 SB6 7・8 外原Ⅱ SB1 9~11 外原Ⅱ SB2 12~15 反畑 SB1 16 御幸町 SB73 17~19 御幸町 SB43 20~22 御幸町 SB146 23~27 御幸町 SB314 28 御幸町 SB159 29 上横山 SB12 30~33 中島下舞台 SB27 34 中島下舞台 SB7 35・36 中島下舞台 SB19 37・38 中島下舞台 SB6 39 伊豆通信 K SB4 40 春蔵 SB7 41・42 伊豆通信 SB15 43 春蔵 SB3

第96図 手捏土器集成図(東駿河地域)

3 手捏土器を用いるカマド祭祀

現場遺跡1-1区SB9や反畑遺跡第3地点の1号住居ではカマドの袖内より手捏土器が出土しており、これはカマド構築時によるものと考えられる。

一方で、伊豆通信病院敷地内遺跡15号住居のようにカマドを解体した燃焼部の覆土より坏が正位状態で設置されていたことからカマド廃棄に伴う祭祀行為が行なわれていたと想定されている。また、手捏土器の煤の付着状況からカマド廃棄に伴いそこで灯明行為が行なわれた可能性もある（渡辺1986）。

カマド祭祀は各地域でそれぞれ多様な祭祀行為が行なわれており、特に関東地方を中心にカマド廃棄時におけるカマド祭祀について積極的に論じられている。今回、東駿河地域ではカマドへの祭祀行為は廃棄時には甕や坏を使用する例は少なく、むしろ手捏土器を用いる例が多いことがわかり、また、構築途中における祭祀行為も手捏土器を使用している。カマド神信仰の浸透により東駿河地域では7世紀末～9世紀にかけてさかんに手捏土器によるカマド祭祀を行なっていると考えられる。

今回は手捏土器を中心に構築時と廃棄時におけるカマド祭祀について検討してきたが、カマドの祭祀行為は手捏土器以外にも甕・坏、鉄鏝などの鉄製品などを使用しており、実に多様な面をもっている可能性があり、特に、カマド祭祀を行なっている住居と行なっていない住居間に階層差・出自の差があるのかより集落内・地域内における位置づけが重要になってくるものと思われる。

参考文献

- | | | |
|------------|------|---|
| 長泉町教育委員会 | 1965 | 『長泉町郷土誌』 |
| 沼津考古学研究所 | 1970 | 『本宿上の段古墳』研究報告第3冊 |
| 伊豆長岡町教育委員会 | 1981 | 『鳥井前遺跡』 |
| 小山町教育委員会 | 1983 | 『上横山遺跡』 |
| 河津町教育委員会 | 1992 | 『春蔵遺跡発掘調査報告書』 |
| 函南町教育委員会 | 1984 | 『間宮川向遺跡』 |
| 函南町教育委員会 | 1995 | 『伊豆通信病院敷地内遺跡』 |
| 函南町教育委員会 | 1995 | 『仲道遺跡第1・2・3・5地点』函南町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ |
| 函南町教育委員会 | 1996 | 『大土肥境B第1地点』函南町埋蔵文化財調査報告書Ⅲ |
| 函南町教育委員会 | 1999 | 『伊豆通信病院敷地内遺跡・十二天遺跡第8地点』函南町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ |
| 三島市教育委員会 | 1958 | 『三島市誌』 |
| 三島市教育委員会 | 1983 | 『中島下舞台遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 1989 | 『安久遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 1990 | 『伊豆国分寺関連遺跡』Ⅰ |
| 三島市教育委員会 | 1991 | 『三島大社境内遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 1992 | 『上才塚第1地点』 |
| 三島市教育委員会 | 1993 | 『金沢遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 1993 | 『桶田遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 1994 | 『反畑遺跡第3地点』三島市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ |
| 三島市教育委員会 | 1995 | 『大場川遺跡群』大場川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 |
| 三島市教育委員会 | 1995 | 『箱根田遺跡』三島市埋蔵文化財調査報告Ⅳ |
| 三島市教育委員会 | 1999 | 『長伏六反田遺跡』 |
| 三島市教育委員会 | 2002 | 『青木B遺跡』三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ |
| 清水町教育委員会 | 1994 | 『上長沢遺跡』 |
| 清水町教育委員会 | 1997 | 『外原遺跡』Ⅰ |
| 清水町教育委員会 | 1998 | 『外原遺跡』Ⅱ |
| 清水町教育委員会 | 1998 | 『清水町史』資料編Ⅱ 考古編 |
| 沼津市教育委員会 | 1961 | 『沼津市誌』上巻 |
| 沼津市教育委員会 | 1978 | 『藤井原遺跡発掘調査報告Ⅰ（遺構編）』沼津市文化財調査報告書 第13集 |
| 沼津市教育委員会 | 1979 | 『御幸町遺跡第1次発掘調査概報』沼津市文化財調査報告書 第17集 |
| 沼津市教育委員会 | 1980 | 『御幸町遺跡第2次発掘調査概報』沼津市文化財調査報告書 第21集 |
| 沼津市教育委員会 | 1981 | 『御幸町遺跡第3次発掘調査概報』沼津市文化財調査報告書 第25集 |
| 沼津市教育委員会 | 1985 | 『豆生田遺跡』沼津市文化財調査報告書 第35集 |
| 沼津市教育委員会 | 1985 | 『台畑遺跡』沼津市文化財調査報告書 第35集 |
| 沼津市教育委員会 | 1994 | 『双葉町遺跡（第1次・第2次調査）』沼津市文化財調査報告書 第58集 |
| 沼津市教育委員会 | 1995 | 『下道遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第57集 |
| 沼津市教育委員会 | 1998 | 『御幸町遺跡発掘調査報告書』遺物編（土器） |